尾張廼家苞

一之上

内務省圖書

第　　共

内閣文庫
和書
八六一六號
類
二〇〇函
九冊
架

和書門
八六一六號
類
九冊
五三架
函

内閣文庫		
番號	和	8616
冊數	9 (1)	
函號	200	170

国立公文書館
National Archives of Japan

松のまどあれハ序に六度集經とゆふ事ありき其
中に載る鏡面王經といふ所に王目しひたるものにまさぐらせ
てぞひ給ふハまづ象といふものを見せてやこゝろみ
けるぐ目しひ見てり王又とふ象ハいかなるものぞと
こたへ言上とぞなし象の鼻を捕て尾なとをとらへ
あるは牙をなでしあるは足をなでしさまざまに申
すに王ハ大きに笑ひて象ハ我らが申せしことくものを
あらずやさしやと王ハ目しひたるもの(?)は仏経を
見さるものを見ずしていふにひとしきことハ數多のあ
りまうしなる故諸宗乃祖師達もかたよりの廣く

荒

抑歌の事とえさらしてかさしも詳と申なりて
是まさら佛乃心ゑんたりしおのしらひかさう
て流布と存するとれもしなやてかの誓
者の足なちち尾をとらて象ハ末の乃ものたりと
こそへしとけらしのひしらへくも滅よ末り和哥
の道も又かくそまへきさそれおのまゝる世の風を
まなひえんとおもふへいもゆる華厳説法いとおもき
ありけれハ志もたく川にたきかさて後成て家郷
なと歌尊ともわかめ考る和哥者流ともしめ何乃
先生られの宗匠さら彼家の足尾なしとさるり

えらくも是多哥なりしんなくていひかたる目しひ乃ともうしろへ
歌をるこをあらもの彼古御いりよ哉かしていうり簇以
のみつんといふかうこちいてなかん独りにおなれたも人生を
世にはしれ哥の博覧卓識乃見解ありて代集ともしも
論をとかまてる其業本申事かいろうてていとめし
されとも七賢漢蒋れたしにて十二青楽とや申す
人ゆう寸打かくぬくいうそりし御多くるハ楕化土の様
根なりしまやおの道さまにわもあまし径えとら
近明に吾ひ東ねしにこれ加重え志くしられらまつハ
かの月しひの月なきさてもしめて全る歌と見えり

もやいさんは世に便えかしこうさへ人やうそ鏡面まへいま
秋継たきんや凹しくいうと是なる事もり浅まき心後ら
ふかまい正宗之眼不退轉なしといふ法よ但ありん地
して識よ一乗の妙法まいらるきそは文字と年
久しく梓よ納めて記あるりにかかる尊すき出あまた
なの其訓にけるとなきん。聲聞縁覚なりしあまし
此こして辰野乃何りにかまふ尾張の家苞と
名はりとて梓木にえりまたにたん衣は浅き乃末明
遍く十方世界の奇まみの底まさとてし渉
度のたまけともなれりしゆそしなんあるかして下品

やむを此物名おもしへそくや妙なんとえお
諸先生のふあまねあおしやしななあるよかしていふ
ことをおもとしまいそゆえ

文政二年四月

石原正侯

尾張廼家苞巻一

此後の尾張の国よりまうでて何くれといふ事
の中に新古今集の歌どものこゝろえぬをとふことゝ
にこたへまよといふたびにかきしあるつひに巻となる
かくて国の人のしたしきどちつどひて書きうつしてえさせよといへば
へるまゝにかきてあたふ

新撰集古今とことはめでてたき事はめでたけれど時よりける
風のさま時世あひてかはりゆく新古今集のよの歌なんか
まなびたる則はさされしも歌さへかはりゆきて轍
人々からおしなべてはいさきにはべる三様にわかれて皆ふうしいるも唯

本居先生のミのゝ家苞なんどは英雄のなぐさミせしものなり
なれどめづらしき説多かれど、ねぢけたる論もおほければ
むかしをしらずなりてあらぬ事に説ましたるかと、まゝ人
まどはさるゝ人これかれおほかるは、やがて人のこゝろ得たる
事にはあれど、殊にいふてしかあるべしと事こゝにはわかちて
書つけたるもの、このかみてかめるひとも後生宅家にてはかりも
の名匠ならぬ人はまよはせてそしられんをもはぢかしと、経
いくまでしるす。取とめたる見解しあらばいはでのまゝに
そひもの本は正し、後のものしめし原切なるはけしわろしやた
よそごとなるにはあらねば、わろきをぬすはこ

まして此先生の是非といふべきしもいとしばしはさし新
古今集のころの歌は、一首の口調をめでたくとゝのふ
る事を本意として、詞のうへ心のうへの降韻を深く
きはめ一首のつゞきは幽玄にしてあやに浅はかならず
おもむけをふかし、深切をいたはりたる宗くもいとあやし
つゞくやうにしも、百般の姿あはれなく、新奇をさきとする
ときつひて、詩人のいはゆる雄偉流暢豪壮新奇といふ志
らへを常にかはりたるの新奇なるおもむきにこゝろをふ
かいといふすにはまことやすしとおもひてかなきうしもあり
ねとにかなる撥ありとも玉となん事を殺して全き尾

さしかりし撰へ。いにしへハ文治より建保までの諸先達のは
世にしましてハ為家まで大人ある時の名匠にて世にほまれ
たる歌ハよろし。秀逸抜萃なる歌ハことなくおもしろく
凡様なるのミそ縁の詞もよく取あつめ上下でしけなくするまでを
しめおんて終身一体の合をきかれなり。けれとも後まかせし
ゆるきたるや。末代このならのえなし。本居先生ハ古学者
ニテ。萬葉以下の書よ通して。めでたき事なれど。抜萃
の論ハあるへきまでも。のけ合などいふことなかりて。当世
と論をきけれども。たとひの水もて四大海の淵を
論ずることいふて。堺を隔て、氣韻をもかなり上下のつけ合ハ

の詞の配當ハ規矩ありしなり。為家までの創意されしをよく成る意
ほよありそりして。為をての執しなるまでを。さし家の縦横なる
係は則と同じていふべき事なるべし。

さて此の歌ハ波のあつの間風の御心をふし下。
世諭よる要なる事ハ先上古の風体ハ流体
し並て古と深からきすと漸よとめしく紀やらにハ文のたるもその姿のすなへ八詞し
わしたる。白河堀河などもきこゆる侍代よりとまくさやうよなをうなる岩をへ山うごき、
松かさを花まきあけよ姿の辻風うるとやかの不足深なる事いてきたりけるハ古に深葉
の風よおきて新しくめつらしくよまれしのことをもあまれ、ひとなくとすいまし今ずり。
とハ後成基俊なとよりはじめて。数千家の歌人の事の好ましきうるさことくある風を
うつりし拾遺集ぬ詞花金葉なさハみなうらうらそめでたくあるなれと。そのかんとハまりけるに
流行たる比物にせんの様にて。継とれけれめてたき事ハめでたきなれど。この習
まひかれたりと思ひけらすけるまで。所謂拾遺集よハ大体なる歌の数も少くあるときさく
しきハ内侍のこころえ流しよりよんぬ人のめてたるみかきの出すそれハあきかて百首歌合家
集まん耳目をよろこバ其事のミ多かる後成にてもはじめてよしけるも深あらそよふくよの小法
弄の歌よなからそれハうき路ありしにて。かりずして背欲してさしくらひやうよどむの意
千載集ハいてきしちる。その千載しなから山にて文治よりつまらひともきまことを研究して
いにしへ入れかハ。千載ハ遮情の菩薩の如来なりけり。けるハ三院あや
しきまて弄のひしかくかり。寺殿下ハ世よあらぬよなまて。定家卿の後日く月くのを

その人は上へとまね出る人々にて[illegible]しきすでにいひのべんとくらべ
なる松の流れは神代より末の世まで此のりくの東は時を得て[illegible]時の名迹
三十人はこれら作りしえける中にも後成定家[illegible]宗匠なりこれ杯は人の家
の誉のことよみかはれたかくて永久の乱とききて[illegible]院がくに仕業しみは猶一の流と
を伝る年[illegible]
英雄の[illegible]魂を[illegible]
家と隆の[illegible]との歌何なれとおれも[illegible]新古今[illegible]集の比
築え及ぶ[illegible]時世の気を常[illegible]百[illegible]何[illegible]数[illegible]後成定家の[illegible]
[illegible]再世[illegible]勤[illegible]
つけたる[illegible]絶[illegible]
今[illegible]世の[illegible]
從弟[illegible]世[illegible]
[illegible]二人[illegible]太郎為氏[illegible]子左[illegible]
号す[illegible]冷泉[illegible]
為世[illegible]歌[illegible]風骨[illegible]後成定家の気韻[illegible]
及[illegible]観雅の中[illegible]風の路[illegible]
[illegible]
上[illegible]為氏[illegible]三代
時の名迹[illegible]
の風[illegible]

[illegible]風雅[illegible]
言[illegible]
[illegible]流[illegible]
我[illegible]
[illegible]
書類[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
その[illegible]普通の小理なれと[illegible]人の[illegible]
[illegible]大き[illegible]正明
尾張[illegible]歌[illegible]
[illegible]事[illegible]今の先生の教

本をよみ又思ひをこらす事日浅しといへどもそのかみ
よりも忘れず侍るなどよく此先生の是非をいへる事ハいと
うるさく議論の末々まで今更のことはやかましくいひ侍れ
に本居宣長大人の流をくむ人の心えおほくなれり
といひしこそのうへにてをしへおきたる定て
よきしらべを数まれたる事もあり岡部の翁のあ
やまりをもれしかられたる事の迹も今は侍れども
しらしめんとおもひ起してかんがへつ

新古今集

春歌上

春たつこゝろをよみ侍りける　摂政太政大臣

みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり

初句はすゞろにいひ出て手をかへたし。此歌はまそてたゞ
あはれなる也。家の者いへれ
はじめてたゞうちよみきてかしこく。のどかにやはらかにおのづからなる
中にみるべきをかくそこら略く
なるべし。又は此歌の此は大かたにはえしもしや山は高くもさて
里と春はまだしかるべきのおくにある事也と二首や山もなき
したゝ河にの宮寂に似あるをなしとかへすべし例此歌のはさらになれ
おもひ侍るし。古人の詞にもなきもの也たゞ大かたにかなしけるやうなるをいひて
こよしのくといふさま山とのみいひ大切なるもなきやうにおもひそ
いひて山とかすめ給ひてかすみをもて雪の如くゆかしきまで春のおとろへの心をさへ
含めたるにていふへきこゝろの山もしかなるけしきに
ゆくなるに竟まさり侍りし。手なきは詞をさはたる故あはれなる
かりは我めでたしと後は下れしふべきもの也しを上るなりてめでたしくの心へなへ
あはれなるもこゝそもあめでたきは有りこそ大かたならぬ世のかいへ又ぞ我もがてと
ことにはありていはるし此の歌の心まりとし此先生なるやへ出せしとて斎の曽
ありけれ。星柄の秋のはたくる山かのかし相交りきかのそれもすつるも星柄

やと出しいて且柄のいひて六作の下に且梅とくらき前にきこゆるそと教へしき。
と僻此御心にあるも将故先生の遺語へいその意は、みよしゆきて六山ゆりの手くし。
けるまで雪の深しれても霞も立て春も来ぬるも、まきそこへ白
雪は、かなにとの序の中ゆしも近日まで雪のふりまさりせたる之。

春の始の歌とて　　太上天皇御製

ほのぼのと春こそ空に来にけらし天のかぐ山かすみたなびく

物語句の手すきたなびくかな。二の句へつゞきてほのぼのとし
らへるをかしく、そくのつゞくるにてもうくえて、山の名ながら天といふとお
照してみるべし。山の名の何となく悉一首にかゝるるさらなる。一首の意は
天のかぐ山にほのかに霞たなびきたるは、春の大空にきたるらしい
とあり、かゝるは、此集の此の歌とは見えてうるはしくめでたき
霞のまよひ山集の此歌のよるは見えてうるはしく
かゝるは天と空とは付合なりしすこしうたかひありぬ付合といふゆゑまみの家てのを
貫そむるをよくならつ御心此集の此は自然なれども聴えあるも。

百首奉りし時春の歌　　式子内親王

山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかゝる雪の玉水

春とも知らぬは松とつきたるし趣の外の悲のあはれなり。
春とも知らぬ松とつきたるはことそへるめ。春ともしらぬ松はいとゞ春の句にかなひ
松の戸にたえだえかゝる川の戸は、はなの戸といふにはすゝめ。その意は、いとゞ
春のいま来てあらうがごとは山の深さを君といふ月は何とかはりなきの戸
雪けの玉水かなへかゝる所にまかしとふとこそ、かの山奥のいかなきはうら
しくたえだえのめぐききこえこしあはれなるしくわれ世にはいと古き集
をたるへといふ縁の一つのあはれにとさらにかのやすらかなるもおそまあり
さんはいつさく個になきを
おもひ一貫の論とすべし。

五十首歌奉りし時　　宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪の中に跡こそ見えね春は来にけり

四の句雪のみあはれなる事の流れなるがれは之。春の本名あとのまま
春はいへるよ人はおもひしまれはそのりしもんは春。人の春の
春にいふかぞ月あるきまし。

入道前関白太政大臣家に百首歌よませ侍りける時
立春のこゝろを　皇太后宮大夫俊成

けふといへばもろこしまでも行春を都にのみと思ひける哉

二三の句のたぐひ二位が歌ともいへり。うたがふべし。大
三位歌ははるかなるもろこしまでも。けふは秋の雲の外たちにも。此哥
のみおもひ入ておもひしにはかなくもたてまつるとかなしきは何となりなん。
立春の歌より春といふ。二月尽の心なるとなりぬべし。
まことにもふるきことばを。月尽の哥ともなりぬ。それもしかるべきかといふ
へだてと人のとりなしたるは。かへりていかなるべし。人にしらず。
めでたしとなる立春とはまことにさるべし。また心にもたがふ
やみぬ。まことにふるまいもなれば。またもかへりて。例ハ精神のきはめもそこなはる
へきまでもとふるまいにのほりあるべし。例は精細なる
なし淡海なる事は従来到らぬ。おつまとおもやすみて八島へ捨れ

とおなじそれよりも西の国ぐにより行かへ。もろこしまでゆくとしく春
をおくりきといへていかに立春の哥より春といふことをわがものと
一ところにおきさて八代ふけ哥ならく文は俗文の事なるを文を作で子を
ハいかなることかめでたきかなし。まことに心ふかく祖父の子としてゆかんた
をよくへて我
おもき哥なり

題しらず　西行法師

岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水道もとむらん

初句から終りまで一首みなよみつゞけたる歌なり。しかれば此法師の歌は深くね
おもし　かくの如くよめるかなしくは思ひ入事なりとなれば立春の心にわ
そしり侍るべしと世後ののちにいたりて定家は風雅
おもしろしとも一方ならずあるべし。しかれども風雅の
とおもひよりては此道に心をよせてよくく此集の事をもそれぞれ
此集の本歌をあて論ぜんとすれば道にさかき
所はなし。宗あまりの心はいかにふかく法師の歌の道をさきとなす事をいふなり　道
もとめし人ぞ世をのがれしはかなくも此法師の口つき

七

しそこと人のえいはぬ事なり　なかなかしらんなどよりもいふ
も同じことなり上句にうけ合奉りしと云事也若菜の下水の行方にとき
みをやつるゝ心はけはかの口つきにて人はえいはぬ事なりといひなしたるなり
水は北陸のかたなる事もしらんと時あるものなりといひ奉りたる也此集の
このたぐひなりけむ人も附ぬるはひとしくすこし平なる哥のことなるところ
めづらしきやうやく一その上は若菜かはらでし氷らなきこと
とけそめし氷若菜の下水とかゝりて行事求めておもへる也

述懐百首に若菜　俊成卿

沢に生ふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖は濡れけり

みの数ならぬ事をいはむとするやさしき歌なりしにはあさき詞なれども此花
いとし身のほどもいとはしき年を経てしかも官位なき沈淪して年をかさぬる
一世のまゝは沢に生ひたる若菜をつめる沢水にて袖をぬらすとよめるにて六歩
なれど世にはしづみたる事をいふも袖はぬるゝとなり

日吉の社にてよみ侍りける子日の哥

さゝなみや志賀の浜松ふりにけりたが世にひける子日なるらん

子日の哥しくききこえ侍る文なり　いまで子日にひく用なき者
とはいふ事もこそあれどいといふもやうやくいにしへといひしてこらき
のちの世の心はなかなかしく侍りしに今はかくしたるにかなはぬ世
の比までは数年にてや哥合なども世をすてたる時のことなり
ひよりの哥は今もしらぬ事にしかなる　下句たがよの子日にひけるぞと
むかしをおもひてこゝろのはれぬ事をいひつゞけたり　世もふりにけり
らいといふ志賀の浜松もいにしへより世にもふりて年を経て
そことなきたとへにいひてけるといふ所ことなり　時代をいふ
すなはちたる常なるをしりぬ
に常にはべり　浜松はいにしへのこる常にあるものなり

浜松と子日は　へきまあり浜松といふ　志賀の浜松はいつの子
かりそめにもいひおきたる比の松なれて松しらず　日本紀に松をよめり
今も常にあるまであれど涼しき詞とはいふなりけり

百首歌奉りし時　藤原家隆朝臣

谷川のうち出づる浪も声たてつ鶯さそへ春の山風

本歌　谷風にとくる氷のひまごとにうち出づる浪や春の初花

風の便よなくてもしらひすけれハ白ハ今ハやう。梢の声を風の便にて
なくてもうらく。といふハ本歌の詞くろかとかくれ波も立
つねの事也先生ハ本歌のやくらくといふを例なりきまくハ脱字
つかりハ鶯をしけそりて声立けせもし山風といへる也。

松前の家にて関路鶯といふ事を

太上天皇御製

鶯のなけともいまた降雪に杉の葉しろき逢坂の山

けふる雪とゝいわとよませ給ひて鶯ハなけともなかなかいてけら侍る
侍る哉古人雅とせけり事兼良の俵ねの所まあしくひつくの様つよ
けれバかくれたるけれハ事のかたハ雅十されたる事なる侍る哉をいはし
き雅とたちひて杉しとて除りしたるへしこのなつとる残た
る所を今のたるハ上つ路をふかはおもひしたるの意ハ鶯
のなきし声もおれもやあわまい雪の侍ておなもの葉の杉ねるよ泊也。

家の百首歌合に、暁雪　摂政

空くもりすゑも風さえて霜ぞよもすがら春夜のる
物なのゆるといふね三四の句へかかり霞の
きとふへけていふいまさとふみ入れて作りまし
とのならぬを今の下すみか霞よそぼる春の月の雪に
まさりとら月てらす哉

空ハかくらいふハ月の光ハいとよく雪
通したるをけるみるハいよいよよく
かあえくしり上の句よ家ち光よるあるへしとおもへらるるわ
さるハ空をけるりてハわすかしや一そのさまハ空ハよくみするを等。風らはえ
てまの月ら雪ちまちりて紙なりをとけてこの家つとれ可を省くれたる枕
みんなるもあれ作者の署名をあはらむれりすちなき哥よあれ歌てあらわ
事なやなん薦み立ちさらひてと源世の哥かの哥もされ給ひて中つ。文をなる
此家苞の文もけせるうとなきハるか事なりきをゆひて下されたくぞし

松前の家にて春山月　越前

山高み猶さえかへる空かきくもり雪ハふりつゝ

春のきはまだ冬をすさまじ春をよくみ[illegible]

冬の月のけしき[illegible]

まことの[illegible]

なかりせば[illegible]

字従の字は眼にて山の[illegible]

そのめる詠をかりせたなし[illegible]

あはれなるは[illegible]

さだかならぬ[illegible]

けしき[illegible]

ほどすぎて春の[illegible]

詩をつくらせて哥にあはせ侍りし　水ニ春色

左衛門督通光

みしまえや霜もまだひぬ芦の葉につのぐむほどの春風ぞ吹く

二の句[illegible]

計の春風のふくなり。おのきこえぬといふ。[illegible]

みれば[illegible]あやしむにもあらず。又芦の角ぐむはわの暖風は

吹わたしれにて芦のきざすやかわ[illegible]

既に解たる跡のいまだ乾かわでといへるは[illegible]

るも既にとけていまだ乾かざるもあるべし[illegible]

差別なき子細にて霜のまだひぬといへる也。[illegible]春めきたる

法の万ハきる事なれども。けていまだひぬをたて霜もまだひぬ

といひてはいかにもきこえず。[illegible]

盤鵜[illegible]厳寒[illegible]姿[illegible]山[illegible]

胴[illegible]

吹て[illegible]

て[illegible]の句にけりのといふ

へき哉[illegible]

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしのわか葉をこゆるしら波

夕月夜ハ塩みちくらしとは時分なり。夕月夜ハ芦のわか葉を浪のこゆるといへる料之。潮時のしるしハみちひきすや。又眺望のけしきかくれなき也。波のこゆる之。此歌夕月夜はしほみちくる潮の芦の葉をこゆるけ方。景気限なし時よせありなとこそハ猶妙なるへし。

春のうた　　　　西行

ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清滝川の水のしら波

高ねの雪とけしといふを解るといふの名にて無之。清滝川の水のなかれも音もなし。此今ハ水かさましけりて定めたること之。清滝川のなかれのまきえる潤よるへし。とくて也たえなしのうたは水の白波ありの増るて流のてうき声する之。

百首の歌たてまつりし時　　惟明親王

うくひすの涙のつらゝうちとけてふるすなからや春をしるらん

つらゝとは氷ひろくこほりたる也。小池のつらゝなとこそいへ。ふしきなる涙ハ是も沢川のことくなまりてつゝく。氷柱をつくとよませつし。此ハ俗言に涙はなるといふ。此歌の心ハ鶯のなけきしほるゝ事そのまゝにて、春にあるへしと解てあるのてうすたねなりし鶯といふもとりしるてたゝみあるうとく之。

前大僧正慈圓

天の原ふしの煙の春の色の霞になひくあけほのゝそら

上の句のかけ烟をなかめたるまゝなり。俗言にいふ思ふといふさまにて降の下も長ふ口の句ハ天の原ふしのなへて春の色よりすゝむる故ハ煙もその霞へ立のほるといひて、揚げ口の句もあけほのゝ空をなかめて久しくてなかめおかす。家隆卿の

波にはなるゝ横雲と同じ体なり。家隆卿の哥も渾祥なり。此哥も渾祥なる哥よりも也
一首の意は富士の山の烟の立て、此の山の嶺が霞となりて
なびく体也。春のあけぼのはかりなき趣なり。なびくとは
立のぼりてなびくけぶりそのまゝすぐに霞となりてよき也。
霞となりてなびくなれば此語意あまりなし。其にて、ゆふの
あつめるを先とせば渾祥にしてうくいうなり。
なびくとも同じことなるべきを、此体と此集の比は春の部
まことにいつれともあるべきことにて、ゆふのほとりにある例のこと
なれ今くんすべきことなれぞ。世上にもなにのちの論をもる歌人ありて絵
とふ類あるを見るにもゆふよせつしきるをいふは、いとんせつなきことなり。山寺縁
ちごうりそ終るはし。其入てゆふのも夕のしるしもなし。ゆふの煙も
夕霞のせいとろ使よ従いてよめる事は、其の家をもる時は大んか〳〵ていとゆふ
さき其比やつの姫乃霞と分りて大空よたなびく時刻をいつとわかとてくらしも
いはし。夜あけぼのゝ
なるゝそありける。空も上よ天原とあれどもかくもわかず。曙の空とは
いへるは也

おのれといふ義にて、蒼天をさしていへるには有らず。瑕瑾とは
いはずかしいさんずんで此語と見る。なかなかにて豪壮の氣あり

晩霞　　　後徳大寺左大臣

なごの海の霞のまよりながむれば入日をあらふ沖つ白波

初句のりしやとあるべき歌なり。うたはいさゝかしるすめ
たゞ霞のまよりといへる本にて題のこゝろははたさず。
ゆすゞの哥のなかめなる入日のあらふも白しかりしかどもあるめて
たぎゞ景氣なるをいとをしきも雅なるとのちる志なえの眞ならず
よも世中よそうくるの事よいとそう物よしずんて此き
たとえらずうちいふよ八多く此ほかにもる様世の哥のすゑ

なのことも語をつくりて歌よおもゝせ侍しよ水郷春望

太上天皇御製

みわたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋と何おもひけむ

此集撰清輔朝臣のうす霧のまがきの花の朝しめ
り秋ハ夕と誰かいひけむとある哥によりて上の句も
まがきの花きりのまがきの花の朝しめりハさらに小夜ふる夕ぐれにしてもさえまうす。又秋ハ夕といふ
も常の事なるにけふへん秋とあるハこれをふくめつゝ
なり。これハいづれも清て此哥の上の句も夕にせすし。水無せ川の
のうた八後鳥羽院の御製にもあるべし　きかれハなりうたいうるべきよ帝
の御哥ハ後鳥羽院にておされたる例なし。声もなきやあはれくのうたき
らかに風韻のつけ給ふ。上句何となく皆への句しきてかけやうに
まことなき世のへるなりけり。かの山とは松原なる三笠山といふにあれ
ともおもひまゝれとも。後鳥羽院の御きしきえ氣韻ハうちなきめ
なれとも求むべき跡なきうしもある寸法一その言ハみなせ川をくるる
せ山すその雪にも春の夕ぐれもあはれなる其の夕ぐれのあはれハ秋にかぎら
ぬ事あるそこ何しきも
ひとしきやんとそ。

摂政家百首歌合に春曙　家隆卿

霞たつ末の松山ほの〴〵と波にはなるゝ横雲の空

末の松山ほのかにすゑのゆきものにしてくにあるに
の哥ハ此集のころかけたる其のさだめたるに。末やさきてある
末の松山なりしとゆゑなんとあるが其いかにも浪のこえけるたぐひに
またとなるも波のこゆるおもしてとあるを。たひたる流にちらし。霞
たつとおのいかゝけあへつゝ　此このうた末の松山も霞にかくの
ことの事あまりて　しかしくちから波よりかゝく横雲
あ方へなかれり。一首のうち横雲をなかへてそ峯に於て
はなれて聞ゆる事ハ浪の上に於てはなれかくして。
一首のうちハ末の松山を霞にかくしてうきのうちに沖の方八よこ雲のなき
ゆこうちとゞめ山を一円に波しなるさすも又ときなおもしくるべし。
上の慈圓大僧正の霞にかすひくも其しはまえ。
これも
撰群之歌はまへにもめてにえれと浪にはなるゝハんゆう

注。山水のうしきめつゝにあるやうにていとん
ゆきめしらきを情なきといひてぬる。

守覚法親王五十首歌に　家しいふかり此本には无何の揃も家ありけるにや

藤原定家朝臣

春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるゝ横雲のそら

とだえをいはんためにと夢を夢のうき橋とよそへたり。
夢のとだえと横雲のわかるゝとをとりあはせたり。すんて云ひとぞ
あらいふ夢の夢物をたてゝせうやうしていひて
創みるよふれいひとりよたくふつ入。三句の下よりはしれ心延。
嶺より下よりも又はてんゆくし。嶺よりわかるゝといふ心は
すたいもいひたるてあるへきなり。
かいろく峰よりわかるゝといひて夢もとだゆるとひきあはせたる。
新なるはしいへ大切なる詞なれば係きと見えたる也。又橋と峰
と取合たる。峰のうへをゆくしわたりて橋ハわすれせたる橋にあり
すくれをみまそく当時の久米の岩橋又神仙よりといわ

たるゝ川入にあるゝふかく橋と岸の間の
きしかてといへんほとしあれこけりなり。四句まてを序にして
つけて横雲のわかるゝとりするに心夢のけしき
うたてもあらんか。此流いとめりしくきこえたし。一首の心ハ
上の句ハ春の夜の眠のさむるに下の句を
夜のあくるに奇なり。けりて夢のうきハしとだえしてといへ夜のあくる
事をいひて横雲の立いとい小言の文象にていとめたし。ハ何とな
き節もことのつけ様よりてわれは何もせし。うつきこのゆる事なり。
すつへに序の心ハ西なよとくるかるねやよそくへき事ヘ生つしつくれて雄
壮の気うしせて起たるもなるわかるゝ事といふ奇もなおりいとて
これらぬからよしもなくよろしきはなう此うき事をもかいてよくきなくハ
あれのこともえて云ふ
えはしいしぬやや。歌はまのめてたきはあらせてハ春の
夜の途なし。夢のとだえ未夜のみしかき事をも思ハせ
たるへのしれと春の夜のみしかきこし中ての夢て残る
へきものなるや。春の夜の係ハ夜のうしきえ〔illegible〕とだえしてとハ夢の中
絶するとなり見ゆをかては夜のわかる事よハいあらず。

はるも八夜のくもりきこうを八わゞ八之。春の夜のかゝりきこし中よ実に残る
べきめやかしわゞ八一いときに。愛にこゝハてゞ夜の明しはまれて残るやうよゝ
一つの趣わくしべき所よありて春の中にまするやうよ
くいせ一つの趣あわいつれをも是この事ともけるとなし。

大そらハ梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

二三の句と霞める空に梅がかのきらゝなるべくもいへるな
せる之。此流のめしげく見ゆる一そのごとしくし。此歌と春の月
うまうて手にやまにとぞ見る之大かたて梅のにほひの空すこしも梅
の香と霞むやうなりとはかるよ花の香の事なれ是月ハもくもと。其の
句くだる出所の趣なじとかて。六哥の趣なじとかたるまおまずはとかわ
と侍之と作る
かゝせる夏をして春の夜の春の月の次方之。此句く梅の所に上
おかる月夜よしくゆのそ来き。次のおう体のは余なりうすくに余なり。
たゞ春の月の作才のまゝハあゝ手。詞のけ合おりそとのけ合あり。梅の句
出る此の香といひて下よ梅。おかとふもりのまゝ八何するおりし梅の句
とけ合たる詞なき故にはたゞ手。此句を除きてたゞ手すゝて

てんきこゆしたる之。四の句を体論よくしたるなり。かくる流もいひて此
ハ又さ句を除きてもきこゆ作之とあるもあらきな
のかぎをつかしたり。揺する八春夜などの凡骨之。用
のかくてもきこえん八それとあれども青哥と
とりわけはてぬ花のまゝよ。梅はたく山の月を余あるおと
あかぬ作とる。此哉人八物よる事清もかゝ千古の秀逸とおぼしき哥
よとゝと出しなるべし。しきる体之出しなる哥いふも
たゞねと春のつりてよまえしいぞく。もとの哥ハ梅のまかいらそハ手すまねどいい
おわして梅のまかいよ手をつとたし。うまるもまたるおくもりもとてぬきふ
事きこえたると。なおかしハ大空ハくもりそて花のまうしふとおもるわ
きうふてかなて八花の句いよそうすかねて句体なるすや。千歳上る世理之
上よ語のあるといひ下よ梅をいひて上下の句合たりと皆ふかわる。
哉人のまうといひうハせん先生のこゝよのせられたるきなゝしらず。

一

梅花にほひをうつす袖のうへに軒もる月のかげぞあらそふ

百首歌奉りし付

一その意ハ梅のくるのにほひを袖の上にうつしる母ハ軒もる月のかけハ。あらそ
つれと其のおもふうきに。月の袖にうつる八月花のあらそはるゝとそせらし。後之

此歌とて今よりきこえるの
家のうちまれなる歌なり。

家隆朝臣

梅がかにむかしをとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる

伊勢物語業平朝臣の月やあらぬ春や昔の歌の詞

をとりてかの朝臣の心をそへてよめる歌なり。ほかやまさしき歌のとわ

此方ある事なれば大かた家その心をあまたそへてその

の懐古の心にもおもふべし。

そのしるしとつけて見るべき月影の袖に梅がかといふは

昔をこひて泪のかゝるさまをやがて月のこたへぬとはして妻

香のことは業平もたえて及びがたきいとはかなき 以上此流のこと

と一首の意は、思ひしきもの昔をかへりぬ梅が香

とへども梅がかこたへずして月そこたへするにたるを

なるべしこたへをせずして其影の袖にうつるよし也。

此流のことし業平朝臣の心をそへてよめるやうのものしき事なきも

しるしてあらはすべし何とかくもしるしもあるまじくかれは大かたふるなし

千五百番歌合　右衛門督通具

梅の花たが袖ふれし匂ひぞと春や昔の月にとはばや

二の句ふるき歌のことばなり　古今色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

梅ともとある歌の詞を二の句にも用ゐたるも同じく古歌の詞をとりたるなどいふべく

あらくとるべきは此句をおもしろくて伊勢物語の業平の事といふを好する

れども春やむかしの月とかむかしの月とかふ事の本歌をとあるに詞を大きく

やむかしのといふ事月夜のやうに古歌などと花やかなるに詞を切ぬく

語の用ゐるは古来さうなり。此集のころの業平朝臣の歌をとりて

春やむかしのといふことをある歌多し。それはその本

哥と作ることになりて此一句よりの前の一首の
ことごとくあやなしとしられたり。月やあらぬの哥をとる
ことなり。あるべきにあらず。此句ハ古今をとりてまた
とかへての懐古よりおこれるなり。これ活用也。此歌にそれぞれ此句ぶ
彼上句のことをとりて。の春や昔の春ならぬとよむ心をとりてやといふ。昔ならぬ袖
とやれてふりかへりてきるよしあるべきことのある所をいへるなり
月もむかしの春の月なれども昔のすがたにかはり
ぬへだてれる昔たる袖をぬれ名残の句ハそれと同じ
事。以上此説のことく何となき懐古のうちの業平卿の昔の春をうらみしといふ事を忘れてたゞ紛れ也。

皇太后宮大夫俊成女

梅の花あらぬ昔もむかしにて形見の春の枕の月
梅の花あらぬ昔をつきたるハ折てなりその歌

の詞なり 昔を宗とする心をあらはしたり。本歌といふはむかし
梅の花あらぬ昔としるし折てこれなり
ら手。これ古今の行平にて此本歌なり。昔を思ひてよみける
ハ五條の西對の事とする。姉なる上の歌のたつ袖ぬれしと同
し淳之介 流し文はりて何となき
懐古の哥にうたふ此の義あり手。 さへて昔といふに二ツ有。
昔よりなりてとく流れもすきことて久しきのまゝにて
うつらぬことよきなり。いふなるハ梅のことなり。以上こゝろえ
歌ものの作る物語のことなり。此歌をその性のこととし何心
春の夜しれ梅といひ昔といふ心ハ二ツ合せて作る物語の
いそれてこれハある常のことにてあらぬハあらぬや
ねしも梅の人にいへれども昔へもかはる世なるものなれども
ねむしのことなり。あらぬハ現在むかしハ過去なれどもあらぬ昔
といふ詞あるべきよあらず一其のあまり古り
ひきてても
きこえ手。一首のことく我先いふべし此哥ハ甲もいく世あれども
たれども梅の花のあらぬ昔もむかしの

もろ共に春夜の月と同しく此方も春の月にあはれなりしの哉
その世のしのみそゝきけり。
見たるも月のことなり。梅花の色も香もむかしの
まゝにて此方にかはりたるそとこそ梅の花さくおなしく月もむかしのまゝそ
とりつきたるをも
人さまゝんとよれるも

題しらす　　西行

とめこかし梅さかりなるわか宿をうときも人ハをりにこそよれ
上二句と句を次第して見へし。とくおなしくわかやとの梅口の
句へとりふれハとめこかしの上よりはて見へし。
此御製下句ハ法師のかりなり。此上人ハ皆国の在
のまゝよみかけし。ゆかりの人にも
名利をはなれて多く[illegible]下句をよみすへきやうなり。わかりき法を
なしくこゝろにて伝にろくに捨られたりし上人の跡ハいとこゝろの方

なといふ（うとき）人もかゝるをりにこそよれ。昔の下水ならひ。又首のをき
宿をかいもて此家の此の昔廻し。此上人の宿ハいかにいそくまゝ。は
うれのはるなし。梅さかりなる家をとめ来れかしといふ心
疎きなるも折よりわかやとの人とはるへき詞をとりて。うとき方なれ
とてもをりにこそよれる事なれし。此梅花の懐かしき
なる宿をハうとき人なれとも
其句をうくとハ一其の梅を云
もといひとりてよそへて見るへき也
嗅
下の句をよめるとなり
人ハとふへからの梅
たゝいかゝ流るゝ也

百首歌たてまつりし時　　式子内親王

なかめつるけふハむかしになりぬとも軒端の梅ハ我をわするな
我なくなりて昔の人となりぬとも軒端の梅ハ我を忘るな
なかめつるとハ今日なかめしハ昔になり
たとひ今の住昔になるとも人の跡そ世の
昔の人といふハ歌なり
換かたるまみれそおのつからきゝハある也。なかめつるけふ
とハなかめつるを云
とゝ思ふ事となり。一そのことはおもひそとして軒端の梅をみつとハ
見えたるをのすを宿ハ死世もうつりて昔とハ

四十よりさきまても梅ハ春立てあるうち
かくに咲て香もよく年をへたり　梅のさかへるはかりしるを

つくへし思ひわかる人もあるましき迄せめし梅ハと心え

てあられ之　なりしかとすへて此花もおしある人もあるましきことくふ
ここに一首を見え侍る故八上の句ことなれ共こへくて

と申て古事とありても梅ハ
存在すへきかなといふその心之　古木花参よりとて家のくしぬ花

あれきつる梅の花を春まてとるまてわかる哥なりお

なるへし

左衛門内大臣家にて梅香留袖

藤原有家朝臣

散ぬれはにほひはかりを梅の花ありとや袖に春風の吹

二の句のをかし　春なれはといふこころなり　散ぬれはと

八重折てうつる梅花のちりしをいかにほゆかしよ

これハ袖と言事よ世界　云よる汁にいふ袖よても袖ことの句いハよくしられ
むかしハ咲たるを折て袖の句ふとあり捨らるゝ人は求

はおれおれたりしにほひもとまれて袖

こそとあるそ　折つれて袖こそ匂へ梅の花
ありやここに鶯のなく　梅のつゆはやうちあ

ゆかる心は条の後のたるなる之本歌のとうりはまぬも

しるし　一首の心ハ梅の花は散れハ匂ひハのり袖に残てなるなきを
まこ花も有と共におもやして家袖に香も世のかくしとえ

題しらす

八条院高倉

ひとりのミなかめて散ぬ梅の花しるはかりなる人はとひこて

本歌ハ只なかめて散ぬへき梅の花いろをもかをもしる人を見つ一首の心
ひとりひとりなかめてあかぬ梅の香をたちよりて見る人をまちて春をなからも
かの人のとひきたりしてよ之本歌のよしはまなかを
あはれにはかの本歌に読みたる上句通句の哥なり

百首歌よみ侍ける時　源具親

難波かたかすまぬ浪もかすみけりうつるもくもる朧月夜に

とらめのよハうつるもくもる朧月夜なる故にかすまぬ

浪もかすみ月夜にかすみけりといふ心也。〈難波潟ハ浪のうへの月〉

もし本歌の心ハ昔をふる理ハ是にてそれにて千さとかれハ水のうへの月

けしきのかすみたるおもむきうつろふ也。此歌ハ面白けれ。

二三の句と四の句との分けめハ明らかならぬとハ安らの旅ハかそた

うきさんぶれし侍るなるをおれハ此侍て論せられしもの

霞かりと言ふ氏下ハうつりてもなく句ゆへ援急の勢ひとかたしけれと

結句まとまりなく強弩之末不能穿魯縞といふへきにつきてかしこき

此先生のいとめてたしとめてたしといへるを心得すしてハ実の杖材にそこの

たのもしきをたとふるに多かるそれにて、のなかそくおしくもあるかな

物学の必やかてそ浅きを見るへし。いと詞の花の山まちかたき此集さうも

まほし宗きいふけ常きもありてかくのさかえこかまきなりやと見えね

古とちさ華やかなる過ぬるといひつてゆきたれとも又今集中むしろ

らの今さ寄ゐるといふかれと此集の山のかまいへく人にハ此集を自在。

大かたハ少しうすき
揚き見解なり

摂政家百首歌合に　寂蓮法師

今はとてたのむの雁もうちわびぬ朧月夜の明ぼのの空

上句ニ二三ト次第してきくへし。田面ハ伊勢物語の

歌よりて此の歌より多くたのむのむかへよむ事とす。〈此上は読〉

〈のふ〉しハ屠ものもしハかたつくしからしかの心なり。

〈もの学の流〉いとまりしそのさま曙ハたえなり川けさる故にハ此よふ

たゝおもしろきへしとすゝて帰る立たるまゝ心にやさを深くいきおひハ

本すき物之これそいきうきかるまちなとからいふもこちらきこゆるよりハ古

人の氣象をおもふにいれくはしくほそのはりきよきをものにまさん

さあやすく又ちんといそのまゝハ田面の朧月夜のあけぼのの空そをと

めさらいさうてもすくやゆふわくそゐなきよ

附かかへりそかもめいろくらゐそならん　とて浪のとふり四面

のおなじ月秋のやどりのくもりなきをこそすゝし別る
事をかなしくみなしてもとなくしくえこふとはな
くよのはていへり。

刑部卿頼輔が歌合に名所よみてつかはし
ける　　　　　　俊成

きく人ぞ涙はおつるかへる雁なきて行なる曙の空

初二句よりつゞきて、きく人も涙をおつるとよむ
べきをかくよめるぞかしはなしのもていらきよんをつく
べし。かへるかりの初句はなくよむ方便なるべしといふ義のことなる
にこそあらめ。ある人はいはくあかつきてそのかしのはらき
の事、多くの中にかくしよむべきよしの初句にて撰集にもあらきものこゝろを
見せんとていふなりとよむべきにやあらん。又おきてのまへ

かへる雁の帰りゆくをきゝてそれをしけ歌　古郷に帰る雁の涙やお
ちつらんとあるなんものにて　古郷とは帰る雁の涙や
古郷の事にてかくいへる也。下のきけるこゑ。　落つらんはみなふ言の事の
上の事をいへるこそ、それをさへあらんとは涙といふかり帰るといふかりの紙なる
うや、なきぬる涙をよしといふは、白平生の事にていづれの歌ぞともいふべき
の事しもあらず。をおきても古き京都はして涙はこぼるゝ故ならん
といへるなり撰集風体となく　名所の歌ぞあるを本意とする事と
よめるを数しらず多くはけれど、はかなくはいかにも涙を
おつるとよめるにて古郷のよりなるまでありあるをかぎるなり。今はなき
別ゆく人なる故に。帰てといふより、いも別をかなしむ心さへこゝえ
たり。これきく人の心をかなしますむ思ふべし。此人
の身にしくも涙をおつるとえ。それは一句の本意、涙を
きく人がむねにすなり。

帰雁　　　　　　摂政

忘るなよたのむの沢をたつ雁も稲葉の風の秋の夕暮

沢とは稲葉をいふ。春と秋との田の地はまはしよく名所なり。沢は地儀

まそ四季をこそたゝるし巻の四のはじまりし定りし。三の句も今ハ
偶次ハをとり〆とまぜかへり付合の第六にかす。いさゝかたゝみ古の次への風を
たちてゆくしものを音す。参考にすべし字をさがしき。
古歌に秋風に物ぐるはしや冬ゆゆる秋風にほそいまは
らうゝはせとあらてよせあり。秋風と〆とをよくあはせたる哥ハ秋ならぬにしけりとて風を
〆の縁の深きといふべし。たゞ楷窯のあはれたらん。半衰へたの
じの次の表の気をとこすゝめり〆て楷窯の風の冬それの秋の気ハすきき
これといふまえく次を表季てけるあ風を〆の縁とあるらよいとく
ハ縁次上下付合にあとつとんとのすなわち。折縁次を上下におけるに
教ハ上下の句をかるゝれしこせどの料にていけの物んを教る法也。
よき哥ハ縁の間の配当をもよるまし。此筆と附の画筆なり。とてよ
とりをそへてんかくし。

百首歌よ附

ゆふ〆ゝとのんあかりに月と花との名でそ見られ

此月花よ二句の名ともみ字見すてゆりし二句よ見られ
ぬなれとあうて月花の名をかれそて月花の名なあよ
名なしきなる。以上る今をもいへるし出る節なへる。
下句よ詞しくあるす。まへてよき哥ハ月花の二季の字降韻
しへまいなをれしもかあんでれ先をめし物をせるあるけるいたの
歌ともいの月の花をしすしたれ此昔よりの哥より出て六〆ものへ
てしくあぬ附節なそ今のんあるなわ下句を出しくあるすいくまへ
てけり風韻きんれとあ付かくしき其れいとこのんを雑てなる
かなどいくいへるかきいれかりして下
句をあらすぬかりして脈をれた。あろうろ之んあるかとい人見
書しなるいしなかとしの〆て熱字よい見かりなれあり
よるこしいれる何の縁あるん。文三の
句ほかりしたゆうしくきくゆ　こハ文字ハいずものんある有
附剤とてあるかのまをふしい間し　哥事としい字を一所ゝあり〆なし
まく。かりし何なたるとしき。文月に出有明といくるあるへしらし

あれとも花のあへしらひの詞のなきはたゝしぬらちす。
此組ハ逢不逢恋をあはせその心ハ上ハ床をわびしく有明と出て下ハ月をいひ
花ハいえんハ合掌の句にてそれ歌もはるかにあはれといふ事なれどされ
とはる句はのわかれハ上下ちうとあり女の様にて上の句をさ下
あはせて下句ところ何にもかゝれとらしちらしたらん。
はる句はうまく山寺にあらす其心をえて答をよするといふやうなるへし

守覚法親王家五十首歌に　定家朝臣

霞まよふ空しくれ戸。緑のゆるつく所に春雨降
霞よつく所しられて有りし所の。と文春雨しられて
ゆるとこそ。たゆたれしさま雨の友しひく世つく所をまくし
ひゝ世文ゆるといひるして上ハ古寺の林あらゆしまなる
たと山のつりきこえたり。あそれ所にしく所あされハ

昔の歌の趣もこゝろえくさりのくさりよきハよしとえらう
たきこゝろはたゞそうし。此先生の歌よむしるけれあるの大山の岩のあるを
なる月よ秋風そふくとよまれくちり。上下ひくきあふ
事をいめらうし之はれと此形のよきハ風調のよきえ。けれ今まハあるす此
此の歌ハ。新奇をつよめて変幻万差なり。階をちうたるれくあす。

百首歌よみ侍りし時　摂政

ゆきハ春る山のいはねよもとも岩のそめぬみとりに春雨そふる
むもと岩のと切てそめぬ緑とつけてんゆへしむもと若
のそめぬとつきてしそまねやといひてハ春もうす。そめぬハ
春雨にそめぬ之。そまぬ緑といふこゝハ峡なるし。一首の意ハ山の岩ね
こゝろそめたるやうよ。ゆきハし若根にそめぬさをたもけたり。
雨のやりそるとさ。こむもと若の。ところそめこゝろもあらすとき八春る深なるよ
ときハ春るハ若をうれり二句よゑつくす。
又若わしそめぬさをたとるあらしきさゝ事。

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹

権中納言公経

高瀬さす六田の淀の柳原みとりもふかくかすむ春かな

淀れし水の深きによそへて緑もふかくかすむといへる。これ例の上下くけ

今の流れに淀ハ六田の淀といふ地名にて柳原の辺なれハ淀の水の深きをいへる事げにもよくよそへたる歌の心もしをおもしろくそこくいふくく霞のたちわたりて物しかし山ふかく久しき物なと武家に並ひたるもあらハこそ深き心。峯隔にかくしたる

一首の意ハ六田のよどの柳原の緑か深くかすみて見ゆるといへる

ながき葉下句ハめでたくあれと心もすこしくきこゆるなり

深く霞みて柳の緑の色を隔て見ることとなるべきニこれ霞也

さてへたつるまでもあらずなかぞらに柳原にこれたる霞のうきみどりに

見ゆる春まさに見えつるハたゞひく山の花のかけもなきやうに

木すゑをもとの色にみよむかしの見えのかたゆゑに

よそても霞たちへだてゝハ柳の字の心ハなきけれハ緑も深く

まいらる霞じあまりよこよこの深きていハ出るへよし

うれしく。くりしを二つとりのたまはしてりみどりもふかくかすみし

ながきといふことつたへし霞にあまりみどりの深きことを

はいかそろ

吹へし。

百首歌よみ侍りける時春歌

殷富門院大輔

一 春かせの霞ふきとくたえまよりみだれてなびく青柳の糸

風のくしくしめくりゆきてめしいつき歌なるべし。この霞のつよさにみだれたるハ青柳上句に春なしとや。

千五百番歌合に　藤原雅経

白雲のたえまになびく青柳のかつらき山に春風そ吹

青柳を葛城の枕ことにせるを、すてゝ青山にせしこと

柳に用いたりけるは柳は風のなびくによりてなびく事
なればたゞしなやかなるはいふなり。されば柳のしなへたる
春風ぞふくとよみたるは柳の枝よりよせて。春
風のなびくにはほのかなりたるものなり。以上は説の如し。しかれども上に
青柳の糸のくといひ下の春風のなびくといふ言の葉そのことは常ある
事のあやなき八姑末つけはかのあまたなきたゞ今の歌にはあら
ず。その心ぞ花しきのたえまに青柳の糸はくはつる山で春風のなびくともゆるとなり。或人柳は山の上に
あるものにあらず雑したれども家隆朝臣の末の
松山霞にふけたる横雲などこそはじめていひあへりて。こ
歌の例にせられけるは。山の上に柳をよめるけり。かの家は此
ことなりしきなり。
集の比にもよりてはなそあまたあるらん。けふのこゑにて
ほのかにかすみわたりてはしけるは眼をとられたるのきたり。
うちかへしいひなきちかくもかの名ありてれしは山すがたよりことたりん
つきこえていふこすよりてたれたがまさせてはさしいろ大かた柳にお
出るとおもしろきにあり。柳は池川堤岸などし。水辺にいとよろしきに
しも山やらかる岸など山柳はかりとやんといつくしかけたる
とぞ柳は山に出る山まれはあまたのあるにもあるなまた何なく
おもしろきにいふ。そのおもしろきとおもしろけるにあらずや
赤ひるは柳はさなるよりも用ゐあるべし。

有家朝臣

青柳の糸に玉ぬくしら露のしらずいく世の春かへぬらん

へぬらんは糸の縁也。糸に玉ぬくしら露の八柳の実景にて しらずといふ序也。かやうなるを有心序といふ。一首の心は青柳はいく世の春をへぬらんといふ義なり。古歌などにある也。拾遺元輔 青柳の緑の糸をくりかへしいくらばかりの春をへぬらんといふ歌をこそ
なるべしとえず。拾遺集なるは糸に玉ぬく露のしらずいく世とつゞけるこそなるべし。されどいく代の
あまたき代

二三句の詞つゞきしなきまて八拾遠てハいとゆかしくもあらすなへて当然なるの
るといふハ一句ハ無證なき事なれとあらす花をそらとたゞ夢とみるしきなかふ
ことハ誰へかよまはれたる世の歌人へも中々よき
歌つくめつらしき作あるところいふなれ。正しく用ゆへきこと也。玉葉集
ことよせあわ下句よいかなみくなとふ詞の
あまんしよ用なしといふそうらし。

宮内卿

うすくこき野への緑のうら若葉に跡まて見ゆる雪の村消

跡とく。雪のきえ果たる後をみるに。雪の縁の
詞とてもあるへからぬあれなるをもあまりたり立てうすくこき若草の緑の
ひとのめしなきをめしたりとするゆへにこれハ世にいとめしたしよろしとよもそいふを
てこゝろうるしなへて二所ハ大とうとて力あるそれし手こゝろしきかよくもあら
す世よ称古ときこゆハ稀なる也からとて云理する所の中よい筆しありハ氣
韵とされたる人の疎漏よよるといふなりしあれと多くハおもしの所ともを。
此集の本色とおかふ敬之先生もいさくめとられて四句いとめつらし
なりよくよくの人る所之と有て。家隆及覆も識者もみる所。雪ハ

残らす消果ての後まて始の村消の所の見ゆるよし
雪の久しく残たる所。早く消たる所のあとも。すこし遅く消たる所。早く消る所二
首のこゝろハ少く若草の緑りの濃きうすきを。雪ハ消はてゝたる後まて
も村消のしるし有て。下の句の
えならぬさまなり

西行

よしの山はなのさくらの枝よ雪ちりて花おそかる年にもあるかな

一首のこゝろハ吉野山の
さくらの枝よ花の咲

よし野山はなのさくらの枝よ雪ちりて花おそかる年にも
ちりてとくいろね花のうへひそか。一首のこゝろハ吉野山の
よ雪の散てまことの花ハとし。さくらの枝よ花の咲
ハ遅かりそうな事てあるとそ。下句ハ此集のころよそてハ此法師
のかりそう。下句ハ上人の常調之ほれ二三の句よいひ
よくおもしてちらてあり極易よるとたる所よ似す。

摂政家百首歌合 權從家隆朝臣

おもふとちそこともしらすゆきくれぬ花の宿かせ野へのうくひすを

我心春の山べにあくがれてなく・ほのかにはるの山べにあくがれてそゞろに出ぬべたいねけど
しかどいふ歌なり一二の句ハ物偽れの心を世に歌なれ・それおすくなよ
またいねとあるよりおもなる趣之たゞけ一をうへとんかれ之。
けの花の陰ハ・言く・いさゝふハ春の山へよりなれそれなくるの花
いふもしあるむりもまでてハ似つかぬ・の陰がハしある歌なり・莫をいふかりしを花と
なわば哥の本哥といふへくしわす・六百番歌合の判は素
性ヶ哥を眼るたるやまいへ作とはハわす・これハ俊成卿 本ゟ本哥を
とるは・多くハまくしと知り(ハ村名のこと)・なつかしく哀なるなりさやうに
うくをとりて趣をかふる之これをこう人ハ奪体換骨
ハかりも多くれたるを名誉とすりへたるかしハかくて数のはしくらうん
わらずめつる之と人ハ古歌をとりるなりと常いふさとみれどふらの子
細ヶいふりしゆゑや一その主ハ気のわふさゞりし・春の山へよ枝もて
こハところも出てめぐ田りそれにかなしき花の中なりしてそれよ趣へのごとく
なすもなお古歌ハ様ねしてしかとわかれいたる
さこれハもわかいのごとく様ねするうへ

百首歌中に　式子内親王

今さくら咲ぬとみえて薄くもり春にかすめる世のけしきかな

初句はなりとす・今といへるハふでいはで上をの人る詞とハ 此初句をたゞ
決然とはしりあくまできはめてもあるきはつなれたる之
一句きり出てハづくまもあらずやあらん一そうよむすみてもいひいとかしたきる之
はるハけるをはらすをとして上句あまりのとへとしてまるよ今
めるの雄壮なるよりみあんぬ奈くよきて縹緲をつくしなる之光せ
ハ门のべくへの臨境をのこときて縹緲の臨境すく・んだやまらんれすの臨
鏡も形能なきのそれもさいふんもんつくるはたなるを縹緲の臨境と氣韻
の臨境も済みきものならればそれをむねとほせるべきかやひめくく
のいがすこしく雄偉なる縹緲の 二の句も世のけしきの
ふけるハあつてこそめしろくなん。
はやくよミいはなる之 此句くはらくへのことうつて世のけしき へハはく
かすこうハ俗よいくくまりはらうる咲たとええ
てといふきえもそりくうへりうす文とといふ字ハまたし・四の句ハ春
の義をふけ部の主要なるをなくてもあるべしとハいふ
のけしきよりすゝめるをいふされしもさりしかし中にくき

此歌・此歌ハ世の人しきりになりて世上から寺へはいりてすむ人多し此
のなかるへきや一そのさハまことはかなき咲たとへにて
世上のくるしきゆへ寺に入りてもすまぬもあり。又ときせに杖
まうしなすくよしむよかしハ誰にもやしき詞なり。
俗言にすまぬにハ杖にすがるといふすの事なれど
俗なることあらねど一向にこゝちよりなきこと。

たのもし

西行

芳野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん
一 そのこぞ吉野山の、こぞの花見にまかりし時の
しをりはまことそのまゝにてあるべきの方ハまちかき
えんでよいとしてしをりのない方へ道をかへて
まだこぬ方角の花をたづねべしとなり。

和歌所にて春の歌　寂蓮

かつらきや高まの桜咲にけり立田の奥にかゝる白雲

高間のはて立田の奥二の間に一つの山といふすあ
らまし。・やといふ字なきは何の
徴かいわれん。

百首歌たてまつりし時　定家朝臣

白雲の春はかさねて立田山をぐらの峰に花にほふらし

本歌・白雲の立田の山の上の小倉の峰に咲たる桜は
・原長哥に
たゞハこくに見ぐ去ハ休ねそ取なりに入ためたし。立田山に
ちかく雲と
むかしまたれ吹はなねとしむすべの
事之教の思ひよらぬ事。結句咲ぬらしとあるべきを句ふらし
とあるハ詞ハさしもなれど此歌にてハ句ふ徊一かりけり。
花のにほらしともこの句ゆゑ、春のみだりにむかし、似つかはしきとハいふく
一 そのそくいつもたつ立ち雲のうへ、春ハ又おもしろくしら雲たつこれ
大くに立田の小倉の峰に花咲てその次に家衡朝臣の哥も
ことうたのりとたゆるのであるらしいとぞ

おなし　これもおなしくよし雲のやうに花のかゝんのりとこゆる也

題しらす　藤原家衡朝臣

吉野山花や盛りに匂ふらん故郷さらぬ峰のしら雲

一首のこゝろ、あの雲ハさらでてんなうて吉野山の花がけふりよ咲てそのこと かやうんのけしきゆゑのてあらう。雲ならハあそこにかゝる峰にかゝるかゆる ことあれハ花つのあらうを はなしてかゝるとぞ。

和歌所歌合に羇旅花　雅経

岩根ふみかさなる山をわけすてゝ花もいくへの跡の白雲

伊勢物語に岩ねふみかさなる山にあらねともとあるを二の句の擬之。
初句ハ岸花さくりの山をいくへもかさねて分て入りつれと 後の方に雲の川へも八重さあれハ大かたと見て来た花であるとぞ。

五十首歌よみし時

たつねきて花にくらせる木の間より待つとしもなき山の端の月

二の句、花をみてくらせるすくなからず尋来ていつ方へもたゞすらして暮らせるよし之。花を尋来て暮らさりける木の間より見ゆるといふよしなり。待つとしもなき山の端の月とよめる、是にも花をたづね来てハ俗に見ても来てといふよりあつらふそこにとゝかめよひたる義にあらすこれさいまう見きりしかとして八雉京の流也とされていへるなり。二句のうけのよんをつくへし。花をこそあらす。たてへしもやれと見の暮るさりときこえすや。りし既に暮れたりして八鳥ねきてといへるも詮なく。たつねきてといふべきを いふ[illegible]八気くいまくこと侍るさそいもちうりやあん揃りて今まこえたる鳥人よ良、為花も侍山のはなりかくこゝに見ゆ也。三の句の合もちのは。侍らふりと花もうけてこゝに新拾遺集後成の歌に山桜咲やねまに出て花の下に月のこゝろ下句思ひうけきた月を見てそれは也しわきまえてそれもあるへき也。

けふそ思ひ四の夕のさま
よし野山ふかくわけ入さくらかなそこともしらぬ花をたつねて

月のすむ山にしかくれて月の方にのみそゆく

ちりたるに〔八〕詞の玉緒ニ二字ゆかしきもの詩をそへて
又ハ侍しかきに此の月をめつるとしもなし人のすみかなし
へきよし山のくの月のおもしろくよく後の人わらふ詩をいひ
なきよ思ひ設さりし夫をそてまた夕暮にも月までのおもしろき
降時は
おもへはたいの後成ての哥し定夕様にも月をめつる方へみえ
なり。後成ての哥八月をめつるによりてかえたるなり
かくしは哥なとよくて顯注を見るたらんは新拾遺のいふるとき
あたりての帰るにゆるよ左の風
しし風韻おそれなる手本なり。

故郷花　慈円大僧正

ちりちらす人もたつねぬ故郷の露けき花に春風そ吹

露けきなと云よくるおもしろきさひしくあはれなるらん

なをも世をうら思ひ後々の行方へ寄する一首の意ハあはれなる
ぬしもなき花ハちるやちらすやと人も尋ねまてさそふよる
とこそとし人もあまたあるへきゆゑと思へるほまれたゝ
かれも遠きそ詞も疑しき事そその意ハちるもちらぬも尋ね来る人もなし
春ハかよひの哥くもしたる花に春風も吹てちらすあとも人も心せたる手
ふしなる
よきなり。

千五百番歌合に　通具卿

いそのかみふるの〻桜たれうゑて春はわすれぬ形見なるらん
植をし折をさへ人もなき　石上ふるの〻への桜の花とあるを
誰うゑてよくしも春ハと切てこゝろ入し忘れぬハ植
えしいにしへをしのはしめし　誰か植てとあるまゝ思ふる人と忘れぬ
人の事とその意ハふるの〻桜ハ昔誰か植て

手てられけるに其たる人ハいかなる人ぞと春ハ比叡におはしまさて
秋にはしたしく時ておもしろきといへるをさしていへる事ハ古今集の中
のよき哥のたぐひ人古を本とする古哥よりしる哥なりしおもしろくきこゆるなり
しかるを近き比とめしらる新古今の風情の古き本の姿をあらはして又古を本
とへ入てしかもあたらしき哥ハ古を本とすべからず侍りけるやしも世上にもはやりてよき哥
多しそるる人々ハ少しも侍りけるに一の姿なりこれも一の姿なるべしよき哥
ハ古しとあたらしき哥ハ百首歌よみたる中にも盛なれども一首もなく英雄豪傑の述
ゆへしもおぼしたるまでもかなはず侍る事も
いさゝかも劣る事ハあるまじと申侍るハ甚すぐれたり

正三位秀能

一 花ぞちる庭の芝草ふみわけて吉野の宮の春のあけぼの

花ぞちるハ花のちるぞといふ也 三ところに入つゝてこゝろうべし

家隆卿

朝日影にほへる山のはなさくらつれなくきえぬ雪かとぞみる

はなさくらの朝日にあたれる色ハことにすぐれて殊に
雪のごとくみゆるもの也朝日かげにほへる山といふハ万
葉の詞にてそれハ朝日影のにほへる山なるをけふこそハ
朝日かげにほふ山のはなさくらの匂へる也 朝日かけにほふ山の桜のつれなくと
まで雪かとぞみるよみあそばす此歌も万葉のごとく朝日かけのにほふ
又詞にしるさてハ[illegible]かくて[illegible]やつ[illegible]
朝日のかげがあたれる山のはなさくらの白きなるを
きえずつよくきえすまかる雪かとみるといふ也
けふよりはじめてはなさくらつれなくきえぬ雪のごとく人に朝日影もしたせ
あり。けふよりはじめてとハ暁春まじる雪の縁あり
きんげ[illegible]のことハなすべきよろしかるべし

国立公文書館
National Archives of Japan